

## キリスト教の基礎(1)

# 運命を切り開く力 脱出と解放の系譜

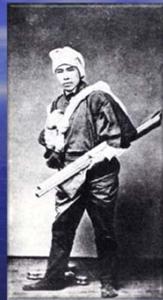
## 脱国までの新島襄



- 幼年期・青年期の新島  
- 21歳まで江戸の安中藩邸内で暮らす
- 空間的な制約: 鎖国
- 時代的な制約: 封建的な社会秩序

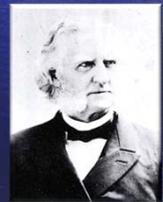
## 新島の新しい一歩

- 「壁」を壊す、「運命」を切り開く
- 「自由」を求めて



## なぜ日本を脱国したのか？

- ボストン到着後の新島がハーディ夫妻に宛てた手紙
- 「私はなぜ日本を脱国したのか」(1865年)



## 手紙の内容

- 知的好奇心・探求心
- 「創造者なる神」との出会い
- 世界観の変化  
- 自由へのあこがれ
- リスクを負うこと

## 聖書とは？

- 旧約聖書 (39巻)  
- 「ヘブライ語聖書」とも言う  
- 律法(生活規範)・イスラエルの歴史
- 新約聖書 (27巻)  
- イエスの物語(4つの「福音書」)  
- 教会の歴史

## 旧約聖書に見る「脱出」「解放」

- 空間的解放
  - 出エジプト (Exile からの Exodus)
  - 「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である。」(出エジプト記 20:2)

## 旧約聖書に見る「脱出」「解放」

- 時間的解放
  - 「安息日」の遵守
  - 「天地万物は完成された。第七の日に、神は御自分の仕事を完成され、第七の日に、神は御自分の仕事を離れ、安息なされた。この日に神はすべての創造の仕事を離れ、安息なされたので、第七の日を神は祝福し、聖別された。」(創世記2:1-3)

## 新約聖書に見る「自由」

- 真理による自由、解放
  - 「あなたたちは真理を知り、真理はあなたたちを自由にする。」(ヨハネによる福音書 8:32)

## 新約聖書に見る「自由」

- クロノスとカイロス
  - 「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい。」(マルコによる福音書 1:15)

## 現代における課題

- 現代社会における「壁」とは何か、「運命」とは何か。
- 「わたし」にとっての「壁」とは何か、「運命」とは何か。

ども内面は卑しくて、さらには世の不正を憤るだけの気概もなく、実にのんびりとしています。また西洋人から軽蔑され、豚や犬のように見られています(以下、破損のため不明)。

### 7 私はずなぜ日本を脱出したのか(脱国の理由書)

一八六五(慶応元)年十月



(28)「連邦志略」\*

【VII-三、X-1-1】原英文。ボストンに着いた新島(二十二歳)が、ワイルド・ローヴァー号の船主、A・ハーディーならびに夫人(ボストン在住)に提出した手記。英語を学び始めて二年目の新島は、同市の船員ホームで自分が渡米を志した動機を渾身の力をこめて英語で綴った。夫妻はこの手記に心打たれて、新島の後見人(養父母)となる決意を固めた。

私はある藩主〔板倉勝明〕の江戸藩邸で生まれた。父〔新島民治〕は藩邸内で書道の師匠と祐筆をつとめた。祖父も藩主に仕える身で、全体〔足軽など〕を取締る執事だった。私は六歳から日本の古典と漢籍とを学び始めたが、十一歳の時、それまでの考えを一変させて剣道と馬術を習い始めた。十六歳の時、漢籍を学びたい気持が高まったので、剣道などはやめてしまった。けれども藩主は私を日誌記録係に抜擢した。しかし、それは私がやりたくなかった仕事だった。私は一日おきに藩邸の執務室に通わなければならなかった。そのうえ自宅に父に代わって男の子や女の子らに書道を教えなければならなかった。そのため漢学塾に通って漢文を勉強することはできなかった。けれども本は毎晩自宅で読んでいた。

ある日、友人がアメリカ合衆国の地図書〔連邦志略〕を貸してくれた。それはあるアメリカの宣教師〔E・C・ブリッジマン〕が漢文で書いたもので、私はそれを何度も読んだ。その本で大統領の選出、授業料無料の公立学校や救貧院、少年更生施設、工場などを建てることを知って、脳みそが頭からとろけ出そうになるほど驚嘆した。そこで私は、わが国の将軍もアメリカの大統領のよ

うでなければならぬと思ひ、こうつぶやいた。

「ああ日本の将軍よ、なぜあなたはわれわれを犬や豚のように抑圧するのか。われわれは日本の人民だ。かりにもわれわれを支配するのならば、あなたはわれわれをわが子のように愛さなくてはならない」と。

その時以来私はアメリカのことを学びたいと思うようになった。しかし、残念なことにそれを教えてくれる教師はひとりもいなかった。私はオランダ語を勉強したくはなかったけれども、私の国ではオランダ語を読める人が多かったから、それを勉強せざるを得なかった。そこで私は蘭学を学ぶために教師の家に一日おきに通った。

ある日、私は藩邸の執務室に出たが、記録するとは何もなくなかった。そこで執務室を抜け出し、蘭学教師の家に行った。やがて藩主が私に会いに執務室に来られた。ところが誰もそこにいなかった。藩主は私が戻ってくるまで待つておられた。私に会うなり藩主は私を殴りつけた。「なぜ執務室を抜け出したのか。ここから逃げ出すとはもつてのほかだ」。

十日後に私は再び逃げ出したが、藩主には気づかれなかった。しかし、残念にもその次に逃げ出した時には見つかってしまい、殴られた。「おまえはなぜここから逃げ

たのか」と尋ねられたので、私は答えた。

「外国の知識が学びたかったです。外国のことをできるだけ早く理解したいのです。ですから執務室に詰めて、お殿さまが決められた規則を守らなくてはならないことは承知しておりますが、私の心は勉強のためにすでに先生の所に行っております。それゆえ私の体もまたそこへ行かざるを得なかったのです」と。

すると藩主は非常にやさしくこう言われた。「おまえは習字が上手だからそれで生計を立てていける。二度とここから逃げ出さないならば、俸禄を増やしてやってもいい。どうしておまえは外国の知識などにあこがれるんだ。それは道を誤るもどだ」と。

私は言った。「どうしてそれが道を誤るものになるのでしょうか。誰でも何らかの知識を持つべきだと思います。知識を全く持たない人は犬や豚にひとしいと思います」と。それを聞いて藩主は高笑いをして「おまえはしっかりと知っている」と言われた。この件では藩主のほかにも祖父、両親、姉たち、友だち、隣人たちが、私を殴ったり、嘲笑したりした。しかし、私は彼らのことを全く気にせずに自分の考えを堅持した。

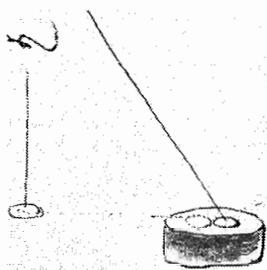
二、三ヵ月後、執務室での仕事が増えたので抜け出せ

なくなつた。ああ、これが原因で私はあれこれと思ひ煩い、病気にもなつた。誰にも会う気がせず、遊びに出たい気持ちも起こらなかつた。ひたすら静かな部屋にこもつていたかつた。ひどい病気だと分かつたので、薬をもらいに医者の方へ行つた。医者は念入りに私の病気を診察した後でこう言つた。「君の病気は心が原因だ。高ぶつた気持ちをまずすっきり静めるようにしなければいけない。身体の健康のために散歩をする必要がある。散歩のほうに薬をたくさん飲むよりもはるかに効き目がある」と。

藩主は病気を治すために時間をたつぷりくださり、遊ぶために父も金をいくらかくれました。しかし、私はオランダ語を学ぶために毎日教師の家に通つた。長時間を費してオランダ語の文法書を読み終えてから自然科学の小冊子にとりかかつた。この本は大変面白かつたので、医者のかれた薬よりもずっとよく私の病気に効いたと思う。

二、三ヵ月後に病気が良くなると、藩主は再び私を抜擢して日記記録の仕事に命じられた。藩主の命令に従つて、私は毎日執務室に詰めていなければならなかつた。ああ、もうオランダ語の勉強のためにそこを抜け出すことができない。私は仕方なく自宅で夜間に時間をかけて

で戦わなくてはならないからだ。しかし、別の思いも浮かんできた。外国人が貿易を始めてから諸物価があがり、わが国は以前よりも貧しくなつた。日本人は外国人と貿易をする方法を知らないから、私たちは外国に出かけて貿易の仕方を覚え、外国に関する知識を学ばなくてはならない、との思いである。ところが国法は私の思いを全く無視したので、私はこ



29 新島がノートに描いた六分儀を操る男

う叫んだ。「幕府はなぜ私の思いを無視するのか。なぜわれわれを自由にしてくれないのか。なぜわれわれを籠の鳥か袋のネズミのようにしておけるのか。そうだ、われわれはそんな野蛮な幕府は倒さなくてはならない。アメリカ合衆国のようになり、国民が直接選挙で大統領を選ばなくてはならない」と。しかし

本を読んだ。そして蘭和辞典をたよりに例の自然科学の本を読み終えた。けれども悲しいことに夜の勉強のために目を傷めたので、またもや勉強を中断せざるを得なくなつた。

十週間たつと目の病気が完全に回復したので、再びその本を読み始めた。けれども計算式でわからないところがあつたので、算術を学びたいと思つた。しかし、そのための時間は全くなかつたからある日藩主に「勉強のためにもっと時間をください」とお願いした。そこで藩主は週三回私が執務室から抜け出すことを許可してくださつたが、私にはまだ十分とはいえなかつた。私はある算術の塾に通つて足し算、引き算、掛け算、割り算、分数、利息算などを修得した。その後、例の自然科学の本を再読すると計算式の部分がよく理解できた。

ある日、私は海が見たいと思つて江戸湾に行つた。そこで私はびっくりするほど大きなオランダ軍艦を見た。それは私には城か砲台のように見えた。この船は敵と戦えば強いだろう、とも思つた。この船を眺めていると、ある思いが頭にひらめいた。私たちは海軍を作らなくてはならぬ、との思いである。なぜなら、わが国は周囲を海で囲まれており、もし外国から攻撃を受ければ、海上

悲しいかな、そのようなことは私の力のおよばないことだつた。

その時以来、私は幕府の軍艦教授所（軍艦操練所）に週三回通つて航海術を学んだ。何か月もかけて、代数学や幾何学が多少分かるようになり、航海日誌のつけ方や太陽の高度の計り方、緯度の測り方なども修得した。けれども悲しいことに夜間の勉強のせいでまたもや目を悪くし、一年半ばかりというもの、全く勉強ができなくなつた。こんなことは人生に二度と起きてほしくない。目が良くなると、藩邸の執務室にまた詰めざるを得なくなつた。

江戸はそのころ非常に暑くて、病人が多く出た。日中、太陽がじりじりと照りつけたある日、夕方に大雨が降つた。その時私は寒気がしてぞくぞくしてきた。翌朝には頭痛が始まり、体内で火が燃えているかのように身体がほてつてきた。何も食べられず、冷たい水を飲むだけだつた。二日後には麻疹が体じゅうに出てきた。麻疹がなおると目が悪くなり出したので、ぶらぶらと過ごす時間が多くなつた。

ある日友人を訪ねると、彼の書齋で聖書を抜粋した小冊子を見つけた。それはあるアメリカの宣教師が漢文で

書いたもので、聖書の中のもつとも重要な出来事だけが記してあった。私はそれを彼から借り、夜に読んでみた。なぜなら聖書を読んでいることが知れると、幕府は私の家族全員を磔にするので、私は野蛮な国のおきてを恐れていたからだ。

私はまず神のことが理解できた。すなわち神は天と地を分けたうえ、光を始めとして草木や鳥獣、魚などを「次々と」地上に創造された。神はご自身の姿に似た形に男を創り、そして彼の脇腹の骨を切り取って女を創られた。神は宇宙のすべてを創造した後で休まれた。その日を私たちは日曜日または安息日と呼ばねばならない。

次に私はイエス・キリストが聖霊のみ子であること、その方は全世界の罪のために十字架につけられたこと、それゆえ私たちはその方を私たちの救い主と呼ばなくてはならないことを理解した。そこで私はその本を置き、あたりを見まわしてからこう言った。「誰が私を創ったのか。両親か。いや、神だ。私の机を作ったのは誰か。大工か。いや、神は地上に木を育てられた。神は大工に私の机を作らせられたが、その机は現実はどこかの木からできたものだ。そうであるなら私は神に感謝し、神を信じ、神に対して正直にならなくてはならない」と。

ともなく、ひたすらこの身を神のみ手にゆだねた。

翌朝私は箱館行きの洋式帆船に乗りこんだ。箱館に到着して適当な英語の教師を探したが、八方手をつくしても見つけれなかった。そこで私の心は一転して、国外脱出を考えるに至った。

しかし、私はためらった。祖父や両親を悲しませるだろう、との思いがあったからだ。その思いがしばらくの間私の心を捉えた。けれどもやがて別の考えが頭にひらめいた。それは、私は両親から生まれ育てられたが、本当は私は天の父のものである。それゆえ私は天の父を信じ、その父に感謝し、そしてその父の道を進まなくてはならない、という考えである。こうして私は日本から連れ出してくれる船を探し始めた。

あれこれ苦労した末に、私は上海行きのアメリカ船〔ベルリン号〕に乗りこんだ。上海の河口に到着ののち、ワイルド・ローヴァー号に乗り換え、約八カ月間中国沿岸を往来した。神に守られて、四カ月間航海したのちボストン港に着いた。

初めて〔同号の〕H・S・テイラー船長に〔上海で〕会った時、「もしアメリカに到着したら、お願いですから学校に行かせてください。よい教育を受けさせてください

この時から私の心は英語の聖書を読みたいという思いに満たされたので、箱館に行つて、イギリス人かアメリカ人の聖書の教師を見つけようと決意した。そこで藩主と両親に対して箱館に行かせてほしいとお願ひした。しかし、彼らは許してくれず、私の願ひに大変驚いた。彼らは私をこんこんと諭したが、私の固い決意は変わらなかった。私は自分の願ひを持ち続け、神に向かつて、「どうかお願いですから志を達成させてください」とひたすら折っていた。

それから私はある日本人の教師から英語を習い始めた。ある日、江戸の街中を歩いていると、私の知人で私を可愛がってくれていた洋式帆船〔快風丸〕の船長〔船員の加納格太郎〕に突然出くわした。「船はいつ出るのですか」と聞くと、「三日以内に箱館に向けて出帆することだった。連れて行つてもらえますか。お願いですから行かせてください」と言ったところ、「連れて行つてもいいが、君のお殿さまとご両親がお許しにならないだろう。まずそちらに頼むことだ」と彼は答えた。

二日後、私はいくらかの金と少しばかりの衣服、それにわずかな書物とをたずさえて家を出た。もしこの金がなくなつたらどうやって衣食をまかなうのかを考えるこ

い。そのため私は力の限り船内で働きますし、あなたから賃銀をいただくつもりもありません」とお願いした。船長は「帰国したら学校に通わせてやろう。そして船内では私の使用人として働かせてやろう」と約束してくれた。船長は金銭こそ支給してくれなかったが、衣服や帽子、靴、その他のものを買ってくれた。船中では航海日誌のつけ方、緯度、経度の測定の仕方を教えてくれた。

当地〔ボストン〕に着くと、船長のおかげで長い間船内にとどまることができた。その間私は船を守る荒くれた不信心な船員たちと一緒だった。港の人は誰も彼も次のように言つて私をおどした。「南北戦争以後、物価があがつたので、陸の上ではおまえに救いの手を差し伸べてくれる者など一人もいないぞ。残念だが、もう一度海に戻るしかない」と。

私は衣食のために相当働かなくてはならないとも思つた。学校に納める金を稼ぐまでは、とうてい学校には入れない。そのような考えにとりつかれると、私はあまり働く気が起こらず、また本も楽しく読めなかった。精神に異常をきたした人のように長時間ただあたりを見回すだけだった。毎晩、ベッドに入つてから「お願いですから私をみじめな境遇に追いやらないでください。どうか

私の大きな志を成就させてください」と神に祈った。  
 それから私は船の持主であるハーディーさまが私を学  
 校へ送り、経費を一切出してくださるかもしれないこと  
 を知った。船長からこのことを初めて聞かされた時、私  
 の両眼は涙にあふれた。氏への感謝の気持が大きかった  
 だけでなく、神は私をお見捨てにならない、と思つたか  
 らである。

1 快風丸

備中松山藩(岡山県高梁市)が一万八千ドルで購入した  
 スクーター船(洋式帆船)。購入には同藩の山田方谷、川  
 田剛などが尽力した。藩主の板倉勝静は新島襄が属した  
 安中藩の藩主(板倉勝明)の自家筋に当たり、幕末には主  
 席老中として將軍(徳川慶喜)を補佐した。この船が江戸  
 と玉島(備中松山藩。現倉敷市)間を試運転した際、新島  
 は勝静の許可を得て、乗船。初航海である。それまでの  
 狭い藩邸中心の生活に比べて、広々とした外界の空気を  
 初めて満喫できた新島には「密出国」の夢を育むきつか  
 けとなった。旅行記として「玉島紀行」を残した。

翌一八七四年、快風丸がサハリンへ航海することを知  
 った新島は再度、勝静から便乗の許可をとって箱館まで  
 赴いた。「密出国」への第一歩である。途中、興津(千葉  
 県、中之作  
 (福島県)、  
 銚ヶ崎(岩  
 手県)、下風  
 呂(青森県)  
 に寄港し  
 た。箱館紀  
 行」③はこ  
 の時の日記  
 である。

2 ニコライ神父

「神田のニコライ堂」で有名なニコライは、箱館で四十  
 日間、新島襄を住みこませた。新島は武田塾への入塾が  
 果たせず、菅沼精一郎の紹介で当時ロシア領事館付司祭  
 のニコライの家庭教師となった。ニコライは新島より七  
 歳年上であった。新島はニコライに「古事記」などを教  
 えるかたわら、彼からさまざまな事を学んだが、性病の  
 恐ろしさもそのひとつであった。新島はニコライに密出  
 国の希望を漏らしたが、「お前さんは若い人には珍しく、  
 決して遊び歩いたりしないから私がここで十分に世話し  
 てやろう」と反対された。

不可解なことに、新島は帰国以後死去するまでの十五  
 年間、日本伝道に従事していたニコライに会おうとして  
 いない。一方のニコライは時に日記に新島の動向を書き  
 記してい  
 る。

コラム・その1



30 山田方谷  
 行」③はこ  
 の時の日記  
 である。



31 ニコライ神父

# 現代のことは

こはら  
小原 克博



あなたは休日を心待ちにしているだろうか。あるいは、平日であろうが休日であろうが、区別なく忙しい日々を送っているだろうか。そもそも、「休む」とは私たちにとって、どのような意味を持っているのか。

は盆と正月くらいであった。それは、休むことを知らない社会、あるいは、休むことを許されない社会であったと言ったこともできる。

多くの人にとって日曜日は休みである。それに加えて、土曜日や国民の休日が休みとなる場合もあるが、少し考えてみれば、このような習慣が日本古来のものでないことは明らかであろう。少なくとも江戸時代まで、一般庶民が休むことができた

開国以降、日本は近代国家としての体裁を整えることに邁進する。その時代、近代国家とは何かということを示唆してくれる人々の中に、在留の外国人がいた。宣教師フルベッキはその一人であった。来日当初、彼は英語教師として働きながら人脈を広げ、後に明治政府の顧問のような役割を果たしていくこと

## 安息日—自由の起源

になるが、彼が日曜日を休日とすることを提案したようである。

フルベッキは、西洋キリスト教社会で一般化していた休日としての日曜日の導入が、日本の近代化にとっても重要であると考えたのだろう。いずれにせよ、日本人にとって新奇なこの休日は、近代化政策の一環として、市町村役場や学校などから徐々に普及していった。

多くのヨーロッパ諸国では平均4週間の長期休暇が保証されている。また、ドイツやオーストリアでは閉店法によって、土曜日と日曜日の商売は原則的に制限・禁止されている。休むことへの並々ならぬこだわりが伝統として息づいているのだ。

は、聖書に記されている「安息日」である。神が命じたのだから、休まなければならない、という理屈は実にわかりやすい。日常の雑事からの解放としての安息日は、人の尊厳を支える根源的な自由を考えさせる機会ともなった。もちろん、こうした宗教的な理由だけでなく、今日の西洋社会における休日が、労働者の保護という側面を有していることは言うまでもない。

わが国でも休日が導入されて久しいが、勤勉の美德が邪魔をするのか、休むことへの罪悪感は根強く存在している。たとえば、中高校生の部活動への献身ぶりを見るとき、そのことを感じさせられることがある。平日は言うに及ばず、ほぼ毎週末のように学校が生徒を拘束する様

子は、休日意識の高い西洋社会から見れば、地獄絵図のように映るかもしれない。日本では、地獄の苦しみを超えてこそ達成することのできる何かがあると考えるわけであるから、もちろん、どちらがよい悪いとは一概には言えないだろう。

ただ私が危惧するのは、若い頃から「休む」ということの積極的意味を味わうことなく大人になっていった場合、繰り返す日常を批判的に見つめる目を養うことがどのように可能となるのか、という点にある。不自由への忍耐を要求する世界に隷従することなく、複数の世界を渡り歩く自由は、充足した安息の内に宿るように思うからである。

(同志社大教授・キリスト教思想)